

ペティ租税論の実践的性格

—国富の増進—

吉田克己

Katsumi YOSHIDA. On the Practical Character of William Petty's Taxation Theory. *Studies in International Relations* Vol. 34, No. 1. October 2013. pp. 31 – 38.

William Petty was of great importance as a writer and thinker during the 1600s in England. His main published works were *A Treatise of Taxes and Contributions* (1662), *Political Arithmetick* (1690), *Verbum Sapienti* (1691), *The Political Anatomy of Ireland* (1691) and *Quantulumcunque concerning Money* (1695).

Petty was a highly original thinker. His ideas of wealth had a great impact on latter economists such as Adam Smith. Our concerns here are Petty's ideas of wealth.

1 はじめに

ウィリアム・ペティ (William Petty) は、イギリスの17世紀重商主義期を代表する著述家である。かれは、その生涯において、数多くの財政経済に関する著作を執筆している。それらは、それぞれに独自のテーマをもって執筆されたものである。

ペティの諸著作の中で、1660年代に執筆された『租税および貢納論』(*A Treatise of Taxes and Contributions*, 1662)と『賢者には一言をもって足る』(*Verbum Sapienti*, 1691) (以下、『賢者一言』と略称)は、ともに財政論策である。前者は共和政体が倒れて王政復古がなった後の財政再建問題に、また後者はチャールズ二世の第二次対オランダ戦争(1665-1667年)の莫大な戦費調達の問題に、それぞれ即発されて執筆されたものである。これら二書のほかにも、『政治算術』(*Political Arithmetick*, 1690), 『アイルランドの政治的解剖』(*The Political Anatomy of Ireland*, 1691), 『貨幣小論』(*Quantulumcunque concerning Money*, 1695)などの諸著作にも、それぞれ租税に関する所見が開陳されている。これらの著作の中で、ペティは、体系的・近代的租税論を展開しているが、その意図するところは、合理的な租税政策の確立であった。しかし、その基底には、共通した実践的目的が据えられていた。それは、イギリスの富強の増

進であった。イギリスの富強の増進とは、とりもなおさず、イギリスの富を増大させるということに帰する。われわれが、ペティの租税論を解明しようと試みる場合には、まず、かれにおける「富」についての見解を明らかにしておくことが求められる。このことが、ペティの租税論を理解するための前提となる。

2 ペティにおける「富」の実体把握

ペティは、その諸著作の各所において、富の概念について述べている。まず、ペティは、1640年代の内乱時代に執筆したと思われるメモ的な断片『産業交易およびその増進についての解明』(*An Explication of Trade and its Increase*, 1647) (以下、『産業交易の増進』と略称)において、経済学的な諸概念についての定義を列挙し、「富んでいる」という概念に対して、「富んでいるということは、自分自身が使用しうる以上に多くの物品を所有していることである⁽¹⁾」という定義を与えている⁽²⁾。そして、「可減的な財貨やつまらないまたは一時的性質を有するような物品の余剰利得は、富の最善の増加ではない。富の最善の増加は、可減的でもなければ、その価値が時間的ならびに場所的な有為転変を経験することもなく、永久的で、普遍的な富といって少しも誤りでない、金・銀・宝石な

どの余剰利得である⁽³⁾」と述べている。ここで、ペティは、明らかに、金・銀・宝石をもって永久的な普遍的富（universal wealth）とみなしているのである⁽⁴⁾。こうしたペティの富についての見解は、後年の『政治算術』の第1章においても、「銀・金および宝石は普遍的な富である⁽⁵⁾」として示されている。すなわち、「産業の偉大にして終局的な成果は、富一般ではなくて、とくに銀・金および宝石の豊富である。銀・金・宝石は、腐敗しやすすくないし、また他の諸物品ほど変質しやすくない、いついかなるところにおいても富である。ところが、葡萄酒・穀物・鳥肉・獣肉等々の豊富は、そのときその場かぎりの富にすぎない。それゆえ、その国に金・銀・宝石等々を貯蔵せしめるような諸物品を産出すること、またそのような産業に従事することは、他のいずれよりも有利である⁽⁶⁾」と主張する。さらに、同様の見解は、第2章において、一層明瞭な内容をもって示されている。少々長いが、煩をいとわず引用すれば、「もし、租税の形で人民から取り立てられる貨幣その他の財産が、破壊され、無に帰されるならば、このような徴税が共同の富を減少させるであろうことは明白である。また、もし右の貨幣または財産が、なんの収益もあげずに王国から輸出されるならば、事情はやはり右と同一か、またはもっと悪いであろう。しかしながら、前述のように取り立てられたものが、一人の手から別人の手へ譲渡されるにすぎないならば、この場合われわれは、右の貨幣または諸物品が、改良を異とする人の手から引きあげられて、よからぬ管理者に与えられたか、それともその反対かを考察しさえすればよいのである。たとえば、かりに貨幣が租税の形で、それを無駄に食べたり飲んだりすることに使う人から引きあげられ、それを土地の改良・漁獲・鉱山の作業・製造業等に用いる別人に交付されたとしよう。このような租税が、右の相異なる人たちをその成員とする国家にとって、有利であるのは明白である。のみならず、もし、貨幣が、それを上述のように食べたり飲んだりすることや、またはその他の腐敗しがちな物品に使う人から引きあげられ、それを服地にふり向ける人へ譲渡されるならば、この場合でさえ、共同の富にとって多少とも有利であ

る。なぜならば、服地は総じて食物や飲みものほど急速に腐敗しないからである。しかしながら右の貨幣が家屋の調度に使われるならば、その利益はなおいくらか大きく、それが家屋の建築に使われるならば、その利益はさらに大きい。もし、土地の改良・鉱山の作業・漁獲等々に使われるならば、その利益はなおさら大きく、金・銀を国内にもちきたすために使われるならば、その利益は最大である。なぜならば、これらの物は、腐敗しやすくないばかりでなく、いかなるときにも、またあらゆるところで、富として尊重されるからである。ところが、腐敗しやすいか、またはその価値が流行に依存しているか、または偶然的に払底したり豊富になつたりするような他の諸物品は、なるほど富ではあるが、そのときその場かぎりの富にすぎないのである⁽⁷⁾」と述べている。ここでは、富が、貨幣たる金・銀を先頭に、その耐久性に応じて評価されている。すなわち、まず、貨幣たる金・銀は、「あらゆるとき、あらゆる場所において富として尊重される」ことをもって、不滅の富とされている。そのうえで、この不滅の富たる金・銀を先頭に、つづいて、家屋、家具、衣服、飲食物というような財貨が、耐久性の大きな順序で、有利な富として評価されているのである⁽⁸⁾。このかぎりでは、ペティは、富の概念について重商主義のそれを踏襲しているといわざるをえない。

しかし、他方で、ペティは、『租税および貢納論』において、「この国のすべての富、すなわち、土地、家屋、船舶、諸物品、家具、銀器および貨幣のうちで、かろうじてその10分の1が鑄貨である⁽⁹⁾」と述べている。また、ペティは、『賢者一言』において、イギリスの国富を次のように算定している⁽¹⁰⁾。

①土地	14,400万ポンド
②家屋	3,000万ポンド
③船舶	300万ポンド
④家畜類	3,600万ポンド
⑤金銀・貨幣	600万ポンド
⑥物品・商品	3,100万ポンド
合計	25,000万ポンド

ここにおいては、ペティは、単に金・銀・宝石のみならず、土地、家屋、船舶、家畜、物品および諸商品等をも富の中に含めている。すなわち、ペティは、意識的に富を有形な生産物一般にまで拡大して把握しようとしているのであり、従来の重商主義的な富の見解に比して、大きな前進を示しているのである⁽¹¹⁾。

ペティの富に対する見解が、重商主義的なそれを超えていたことは、かれの「他の著作に認められる重商主義的諸見解の最後の痕跡がここでは完全に消え失せている⁽¹²⁾」と評されている『貨幣小論⁽¹³⁾』において、一層明確な形をもって示されている。ペティは、32個からなる問答形式で叙述した同書において、「もし、1シリング貨が新鑄によって現在の量目の4分の3に縮減されるならば、われわれは現在よりも4分の1多くの貨幣をもつことになり、またその結果、それだけ富むことになるだろうか⁽¹⁴⁾」との問に対して、「なるほど、諸君は、新名目のシリング貨を3分の1だけ多くもつことになるであろう。しかし、諸君は、1オンスたりとも多くの銀または貨幣をもつわけではないし、また新たに増殖された諸君の貨幣のすべてをもってしても、従来よりも1オンスたりとも多くの外国品を獲得できないであろうし、さらには国産品についてさえそうであろう⁽¹⁵⁾」と答える。また、「一国の貨幣が少なければ少ないほど、その国はますます貧乏なのではなからうか⁽¹⁶⁾」との問に対しては、「必ずしも、常にそうとはかぎらない。というのは、最も裕福な人たちがその手元にほとんどまたはまったく貨幣をもたず、これをさまざまの物品に取り替えて回転させ、大利潤をあげているように、多数の個人の結合体にほかならない全国民もまた、同じことができるからである⁽¹⁷⁾」と答える。さらに、「もし、われわれがもっている貨幣が多すぎる場合はどうであろうか⁽¹⁸⁾」との問に対して、「その最も重いものを熔解して金銀の華麗な皿にしたり、容器や什器にしたりしてもよいし、またそれを要望しているところへ物品として送ってもよいし、あるいは利子の高いところがあれば利子をとって貸し付けてもよい⁽¹⁹⁾」と答える。これらの言説によれば、ペティは、明らかに、単に貨幣だけではなく、生産物一般をもって富の実

体であると考えているのである。ここにおいて、ペティは、富＝金・銀（貨幣）という重商主義的な富の見解からほとんど脱却して、富を生産物一般にまで拡大しているのである。経済学の発展史における富の把握の相異について貴重な研究をなしたエドウィン・キャンナン（Edwin Cannan）は、その名著『生産および分配学説史』（*A History of the Theories of Production and Distribution in English Political Economy from 1776 to 1848*, 1922）において、ペティを重商主義の著述家のひとりとして位置づけたうえで、「アダム・スミス（Adam Smith）と同じように、一国民の貨幣はその国民の唯一の富ではないということを、実際には、よく知っていた⁽²⁰⁾」と主張している。まさに、当を得た指摘であるといつてよいであろう。

最後に、ペティは、富の見解において、富を君主個人の富または国庫的富としてではなく、「人民の富」すなわち市民社会の富として把握している。ペティは、「国王の富」を区別して、「国王の富は三重であって、一はその臣民の富、第二は臣民の富の分担額、すなわち人民の公共的防衛・名誉および外飾のために、また一人あるいは数人の私人の資力ではおよばぬような共同の幸福のための事業を管理するために、国王に与えられるものである。第三の部類に属する富は、最後に述べた分担額のうちの一部であって、国王が自分の個人的好みや裁量にしたがい、無報告で処分してさしつかえないものである⁽²¹⁾」といっている⁽²²⁾。すなわち、ペティは、「国王の富」は三重であるといっているが、基本的なものは「人民の富」である。この「人民の富」から財政資金が徴収され、その財政資金の一部が割かれて、国王の個人的家計費になると観念している。このような考え方によれば、国富とは、当然に人民の富そのものでなければならないことになる。したがって、国が富むということは、人民の富が大なることであって、国王の個人的富が大なることではないのである。換言すれば、ペティは、国富を「国王の富」としてではなく、市民社会の富として捉えていたのである⁽²³⁾。こうした富に対するペティの立場は、『政治算術』の第2章でイギリスとフランスとの国富を比較するに際して、一層明確に示されている。ペティは、「フラ

ンスの国王は、現在その人民の富の5分の1を取り立てているといわれているが、なおかつ王国の現在の富および力はおおいに誇示されている。ところで、人民の富と人民から自分の欲する場所・時期および割合で奪取している絶対君主の富とを識別する場合には、十分用心しなければならない。のみならず、二人の君主の臣民が同等に富んでいても、一方の君主が他方の2倍だけ富んでいることもありうるのである。すなわち、一方の君主が人民の生計の資の10分の1を徴してこれを意のままに処分しているのに、他方の君主が20分の1しか徴しない場合がこれであって、むしろ一層貧しい人民の君主の方が、一層富んだ人民のそれよりも、もっと堂々として栄光に満ちているように見えるかも知れない⁽²⁴⁾」⁽²⁵⁾。

なお、イギリスでは、中世以来、国王は自己の収入で生活する、また、その自己の収入をもって政府を維持し、国家を統治するものであるとの見解がとられてきた。したがって、国王の家計と国家の財政との区別は、必ずしも明らかではなかった。これら両者が明確に分離されるのは、1688年の名誉革命後における王室費（Civil List）の制定においてである⁽²⁶⁾。こうしてみると、先におけるような財政資金の一部が国王の家計費として割かれるというペティの考え方は、いち早く王室家計と国家財政との区別の認識を示唆しているものであり、ここにかれの近代的財政概念に対する先駆性をうかがうことができる⁽²⁷⁾。

3 富の源泉としての労働の重視

ペティにおいては、富は単に金・銀・宝石にとどまらず、有形な生産物一般にまで拡大されていた。こうした富の概念の拡大に応じて、富の源泉もまた、生産過程において求められている。

まず、ペティは、大陸での遊学を終えて帰国した20歳台の半ばに執筆した『産業交易の増進』において、労働を「諸物品のための人間の単純な運動で、人間が自然的にそれに耐えうるだけの時間に対応するものである⁽²⁸⁾」と定義し、その労働と土地とをもって富の源泉とする考えを示している。しかも、ペティは、産業交易の発達にともなって、

富の増大における土地の比重よりも、労働の比重が大きくなるものと考え、「もし人間が、獣のように天然の産物で生活し、それらが生育するがままに消費し、しかも一つの物品しか存在しなかったとしたら、産業交易はまったく存在することはできないだろう。しかし、もし諸物品が多種多様になり、しかも、すべての人がかれの興味、労働、熟練および力が生産しうるようなあらゆる種類の物品を消費するようになるとすれば、産業交易は極度に増進するであろう⁽²⁹⁾」⁽²⁹⁾といっている。ここで、ペティによれば、産業交易がまだ発達していない状態とは、衣・食・住に関連する最低限の産業交易しか存在しないような状態である⁽³⁰⁾。こうした状態からさらに産業交易が増進すると、「食についての産業交易は穀物の耕作者と家畜の飼育者に分化され、衣についてのそれは、織布職、いかげ職、裁縫職、および靴職、革職に、さらに住についてのそれは、かじ職、石工および大工に分化される⁽³¹⁾」⁽³¹⁾という。このようにして、分業の発達で産業交易が増進していくと、「産業交易の程度が低かったときには、地主の力がより大きく、土地がいわば国民の唯一の富であった⁽³²⁾」のであるが、「増加した人々の労働が土地と等価となり……地主と産業交易者の力が均衡する⁽³³⁾」⁽³³⁾という。さらに、産業交易が一層増進すると、「産業交易者や各部門の専門家たちの力が、最初の場合に地主の力が産業交易者を上回っていたように、こんどは地主の力をはるかに上回るようになるだろう⁽³⁴⁾」⁽³⁴⁾という。ここで、ペティは、明らかに、富の源泉としての土地と労働が、分業と産業交易の発達にともない、その比重が土地から労働に移っていくものと考えているのである。こうした、富の源泉における労働重視の考えは、後の『租税および貢納論』において、ペティの財政経済論の核心をなす、「土地が富の母であるように、労働は富の父であり、能動的要素である」(Labour is the Father and active principle of Wealth, as Lands are the Mother⁽³⁵⁾)という有名な命題として結実されている⁽³⁶⁾。また、ペティは、別の個所で、「国民の富・資財または準備金と呼ぶところのものは、以前のまたは過去の労働の成果である⁽³⁷⁾」⁽³⁷⁾とも述べている。ようするに、ペティは、労働と土地という富

の二つの源泉のうち、とくに労働がその能動的要因であり、第一義的に重要であると考えているのである。

そもそも、イギリスの重商主義学説のうえで、富の源泉としての労働を重視した最初の人物は、クレメント・アームストング (Clement Armstrong) であるといわれている⁽³⁸⁾。アームストロングは、16世紀の初頭に、羊毛商人による投機がイギリスの貨幣を国外に流出させ、農業を衰退させることを懸念し、国内における毛織物生産のために人々を就業させ、農村におけるマニファクチュアを奨励すべきことを提案した⁽³⁹⁾。その理由は、かれが、「全王国の富は庶民の労働や仕事にその源を発する⁽⁴⁰⁾」と考えたからである。その後、17世紀の初頭には、労働が富の源泉であるという思想は、より一般的なものとなった。トーマス・マン (Thomas Mun) は、1621年に公刊した最初の主著『イングランドの東インドとの貿易に関する一論』(A Discourse of Trade, from England unto the East-Indies, 1621)において、富を自然的富と人工的富とに分け、前者は「領土そのもの」から生ずるもの、後者は「住民の勤労に依存するもの」とし、「勤労は、海外貿易を増大し左右するためばかりではなく、国内における諸技術を維持し増進するためにも、その役割を演じなければならない⁽⁴¹⁾」と述べている。マンも、国富増進における労働の役割を重視している点においては、ペティと同様である。そして、富の増大をイギリスの富強のための国家目的としている点において、両者とも重商主義者である。両者の異なる点は、マンが国家財政の財源を順なる貿易差額による財宝の流入に求め、労働に基づく人為的富の増大もこうした流過程の中に包摂して論じているのに対して、ペティの場合には、近代的租税制度の生成期に当たり、国家の財政的基礎を国民一般の負担する租税に求め、生産過程における労働を直接に国富増進の源泉として論じていることである⁽⁴²⁾。ペティは、最初に、しかも科学的な方法で、イギリスの国民経済における労働の意義を生産面から認識し、論述したのである。

次に、富の源泉としての労働を重視したペティにとっては、その労働は一般に国民の増加にとも

なって増大することになるので、労働人口の増加をもって富の増大をもたらすものと考えられた。ペティの次の言葉は、労働人口の増大の重要性を表明したものである。「人民が少数であるということは真実の貧乏である。つまり800万の人民がいる国は、同じ地域に400万しかいない国よりも2倍以上富んでいるのである⁽⁴³⁾」。ここにおいて、ペティは、人口が大なることは、当然に労働する人々が大なることを意味し、したがってまた、富の生産の大なることを意味するものと考えているのである。そこで、ペティにとっては、イギリスの人口の増大が富の増大のための重要な課題となる。

しかし、単なる人口の増加だけでは、ただちに富の増大とはならないであろう。なぜならば、国民の中には、富の増大に寄与する者もいれば、富の増大になんら寄与しない者あるいはまったく労働しない者もいるからである。そこで、ペティは、有用で物質的なものを生産するかどうかを基準として、労働の概念について生産的労働 (productive labour) と不生産的労働 (unproductive labour) という二つの概念を明瞭にしている⁽⁴⁴⁾。ペティは、「かりに勤勉にして創意に富む人たちの資財、すなわち、自分たちの生活している国を、洗練された飲食物・服装・家具・気持ちよい花園・果樹園および公共の建物等々によって美化するばかりではなく、貿易や武力によってその国の金・銀および宝石を増加させもする人たちの資財が、租税のために減少し、しかもそれが食べたり・飲んだり・歌ったり・遊んだり・踊ったりする以外には全然能のないような人たちに譲渡されるとしよう。否、形而上学その他無用の思弁にふけるような人たちが、さもなければ、物質的な物、すなわち国家社会において現実的な効用・価値をもつ物をな一つとして生産しないような人たちに譲渡されるとしよう。この場合には、社会の富は減少するであろう⁽⁴⁵⁾」というのである。この引用文によれば、富を増大させる者は、飲食物・服装・家具・花園・果樹園・公共建築物などを生産あるいは築造し、貿易や武力でその国の金・銀・宝石を獲得する者である。反対に、富の増大に対してなんら貢献しない者は、飲食、歌舞、演劇にふける人々、形而上学その他無用な思弁にふける人々、すなわち物

質的な物、国家社会にとって現実的な効用ないし価値ある物を生産しない者である。ここで、前者が生産的労働で、後者が不生産的労働である。この場合に、ペティは、これらの区分の基準を、すでに述べたように有用にして物質的な物を生産するかしないかに置いている⁽⁴⁶⁾。このかぎりにおいては、ペティの生産的労働と不生産的労働との区分は、アダム・スミスのそれときわめて近いものといえることができる⁽⁴⁷⁾。すなわち、いまや富の実体は生産物のうちの有形財であるとして把握されており、それを生産する労働が生産的労働であり、そうでないものが不生産的労働である。ペティが、形而上学やその他無用の思弁にふける者を、富の増大に寄与せざる者、すなわち不生産的労働者の部類に含めたのは、アダム・スミスが、いかに有用であっても無形財の生産に従事する者を不生産的労働者としたのと似ている⁽⁴⁸⁾。ペティは、不生産的労働の問題に関連して、行政・法律および教会に関連する多数の官職と、神学者、法律家、医師、卸売商、小売商の数の削減を説いている。とくに、卸売商と小売商については、「これらの人たちは、貧民の労働をたがいにもてあそんでいる博徒であって、社会からは、本来的に、そして本源的になにものをもかせぎとることをしない徒であり、また、政治体の血液と養液、すなわち農業および製造業の生産物を前後に分配する静脈および動脈のほかにはなんらの果実をもけって生み出さぬ徒である⁽⁴⁹⁾」といて、痛烈に批判している。

イギリスの富強を願うペティにとって、政策上問題とされるのは、不生産的労働者もしくはまったく労働しない者を削減し、生産的労働者を増大させるということである。まず、不生産的労働者の問題についてであるが、ここで注意しなければならないことは、一口に不生産的労働者といっても、必ずしもまったく無用な労働者とはかぎらないことである。すなわち、国家の存立上有用ではあるが、しかし、富の増大という見地からは直接的な関係がないという意味で、不生産的労働者の部類に含められる広範な階層が存在する。このような不生産的労働者の一定人口は国家の存立上必要であり、これを確保し維持しなければならない。しかし、それ以上のこうした階層の存在は生産的

労働者の人口を少なくさせるという意味で、富の増大の見地からは有害である。そこで、このような不生産的労働者階層の必要人口を各部門別に算定し、現実の人口を調節してこれに合致させて、過剰部分を生産的労働者に移し替えなければならない⁽⁵⁰⁾。労働しない者の存在についても、ペティによれば、これはまったく不必要な存在の者であるので、すべて生産的労働者にしなければならないことになる。

4 むすびにかえて

イギリスの16、7世紀は、重商主義思想と政策が展開された時代であり、また資本主義の生成期でもあった。そこでは、国民的生産はいまだ大部分が封建的形態の下で行なわれていたが、それと同時に商品経済が次第に浸透しつつあった。こうした中で、初期の重商主義者たちは、近世資本制社会の最初の時代的代弁者として、金、銀、宝石こそが富であり、それは商品の流過程たる外国貿易においてのみ獲得されると主張した⁽⁵¹⁾。

これに対して、ペティは、富を単に金、銀、宝石にとどまらず生産物一般にまで拡大して捉え、その源泉を生産過程に求め、したがって結局労働に帰した。これは、従前の重商主義者に対するペティの一つの前進を意味しており、アダム・スミスに代表されるイギリス古典学派とほぼ同じ立場に立つものであった。このような富に関するペティの見解は、当時のイギリスにおける一層発展した経済事情を反映したものであった。すなわち、ペティの時代のイギリスにあつては、商品生産がかなり一般化し、産業資本は次第にその支配を確立しつつあったのである。このことが、ペティの富についての見解を初期重商主義のそれから免れさせ、むしろ産業資本の立場に立つイギリス古典学派のそれに近接したものにさせたのである⁽⁵²⁾。

ペティは、国家権力の対内的維持も、また国威の対外的発揚も、基本的には国富の大きさに依存すると考えていた。こうした明確な認識の下に、イギリス国家の富強を希求する当然の結果として、ペティの関心は、その国富を増大させることに向けられた。そして、一切の政策がこの目的に集中

させられ、租税政策も例外ではなかった。むしろ、その目的達成のために、租税政策の効果に寄せるペティの期待にはおおきなものがあつた⁽⁵³⁾。ペティが諸著作を通じて展開した租税論は、イギリスの富強の増進＝国富の増大という実践的目的によって貫かれているのである。

注

- (1) William Petty, *An Explication of Trade and its Increase*, in Marquis of Lansdowne, ed., *The Petty Papers, some unpublished Writing of Sir William Petty*, Vol. I, London, 1927, rpt. New York, 1967, p.210.
- (2) 他の諸概念は、以下のものである。諸物品 (Commodities), 産業交易 (Trade), 貨幣 (Money), 必需品 (Necessaries), 力 (Power), 偉人 (Great Men), 主権者 (Sovereign), 富んでいる・力のある・偉大 (Rich, Powerful, Great), 労働 (Labor), 熟練 (Skill), 技術 (Art), 貨幣の利子 (Interest of Money), 為替料 (Exchange of Money), 共通価格 (Commonprice) (*Ibid.*, pp.210-211)。
- (3) *Ibid.*, p.214.
- (4) 大淵利男『イギリス財政思想史研究序説——イギリス重商主義財政経済論の解明——』評論社, 1963年, 253頁。
- (5) William Petty, *Political Arithmetick*, London, 1690, in C. H. Hull, ed., *The Economic Writings of Sir William Petty*, Vol. I, Cambridge, 1899, p.259. 大内兵衛・松川七郎訳『政治算術』岩波書店, 1955年, 50頁。
- (6) *Ibid.*, pp.259-260. 同上。
- (7) *Ibid.*, p.269. 邦訳, 67-68頁。
- (8) 渡邊輝雄『創設者の経済学——ペティー, カンティロン, ケネー研究——』未来社, 1961年, 33頁。
- (9) William Petty, *A Treatise of Taxes and Contributions*, London, 1662, in C. H. Hull, ed., *op. cit.*, Vol. I, p.34. 大内兵衛・松川七郎訳『租税貢納論』岩波書店, 1952年, 63頁。
- (10) William Petty, *Verbum Sapienti*, London, 1691, in C. H. Hull, ed., *op. cit.*, Vol. I, pp.105-108. 大内兵衛・松川七郎訳『賢者には一言をもって足る』(同訳『租税貢納論』岩波書店, 1952年, 所収), 169-174頁。
- (11) 渡邊輝雄, 前掲書, 14-15頁。
- (12) Friedrich Engels, *Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft*, Stuttgart, 1894, in *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Bd.20, Berlin, 1962, S.218. 栗田賢三訳『反デューリング論——オイケン・デューリング氏の科学変革——』(下巻), 岩波書店, 1974年, 143頁。
- (13) この小論が執筆された時期は、必ずしも明らかではないが、1682年の8月か9月頃であるとされている。
- (14) William Petty, *Quantulumcunque concerning Money*,

London, 1695, in C. H. Hull, ed., *op. cit.*, Vol. II, p.441. 松川七郎訳『貨幣小論』(森戸辰男・大内兵衛編『経済学の諸問題』法政大学出版局, 1958年, 所収), 108頁。

- (15) *Ibid.* 邦訳, 108-109頁。
- (16) *Ibid.*, p.446. 邦訳, 115頁。
- (17) *Ibid.* 同上。
- (18) *Ibid.* 邦訳, 116頁。
- (19) *Ibid.* 同上。
- (20) Cf. Edwin Cannan, *A History of the Theories of Production and Distribution in English Political Economy from 1776 to 1848*, London, 1893, 3rd ed, 1917, rpt. 1922, pp.4-5.
- (21) William Petty, *Political Arithmetick*, *op. cit.*, pp.298-299. 邦訳, 121頁。
- (22) この点について、井手文雄は、「この三重の富を一括して『国王の富』と称しているのは矛盾であり、ペティにおけるカメラリスムス的要素の存在を示唆するようにも思われる。しかし、より本質的には、かれはカメラリスムス思想を脱却している」と評している(井手文雄『古典学派の財政論(増訂新版)』創造社, 1960年, 46頁)。
- (23) 同上書, 46頁。
- (24) William Petty, *Political Arithmetick*, *op. cit.*, pp.271-272. 邦訳, 72頁。
- (25) ハルは、「ペティが国富の国際比較をなすに当っては、それが国庫の収入とは異なるものであり、国家にとって独立の重要性を有するものであることを認めているにもかかわらず、かれは完全にはカメラリスムス的観念から脱却しえず、常に、土地、財産および人民の財政的重要性を重視している」と述べている(C. H. Hull, ed., *The Economic Writings of Sir William Petty*, Vol. I, Cambridge, 1899, pp.lxxii-lxxiii)。
- (26) Cf. Paul Einzig, *The Control of the Purse: Progress and Decline of Parliament's Financial Control*, London, 1959, Chap.18. 長谷田泰三『英国財政史研究』頸草書房, 1950年, 第7章。
- (27) 井手文雄, 前掲書, 46頁。
- (28) William Petty, *An Explication of Trade and its Increase*, *op. cit.*, p.211.
- (29) *Ibid.*
- (30) *Ibid.*, p.212.
- (31) *Ibid.*
- (32) *Ibid.*
- (33) *Ibid.*, p.213.
- (34) *Ibid.*
- (35) William Petty, *Treatise of Taxes*, *op. cit.*, p.68. 邦訳, 119頁。
- (36) なお、このペティの命題は、グラントの著作の中にも、多少異なった表現で、「土地が富の母であり、胎であるごとく、人手はその父である」として出ている(John Graunt, *Natural and Political Observations……, upon the Bills of Mortality*, London, 1662, in C. H. Hull, ed., *op. cit.*, Vol. II, p.373. 久留間敏造訳『死亡表に関する

- る自然的及び政治的諸観察』栗田書店、1941年、184頁。また、ジョンソンは、土地と動労とを富の源泉とみなす考え方は当時の通説であって、古くはラティーマー（H. Latimer, 1485-1555年）から最後の重商主義者ジェームズ・ステュアート（James Steuart, 1713-1780年）に至るまでのイギリスの著述家に見られる教義を、ペティがこうした形で簡潔に述べたものであると述べている。Cf. E. A. J. Johnson, *Predecessors of Adam Smith: The Growth of British Economic Thought*, London, 1937, rpt. New York, 1965, p.243.
- (37) William Petty, *Verbum Sapienti*, *op. cit.*, p.110. 邦訳, 179頁。
- (38) 一方、ヤルマール・シャハトは、富の源泉としての土地の意義を推察した最初の人物として、ジョン・ヘイルズ（John Hales）をあげている。Cf. Hjalmar Schacht, *Der theoretische Gehalt des englischen Merkantilismus*, Berlin, 1900, S.76. 川鍋正敏訳『イギリス重商主義理論小史』未来社、1963年、154頁。
- (39) Cf. Clement Armstrong, *Howe to reforme the Realme in setting them to Werke and to restore Tillage*, 1535-1536, in R. H. Tawney and Eileen Power, eds., *Tudor Economic Documents*, Vol. III, London, 1924, new imp. 1965, p.115.
- (40) *Ibid.*
- (41) Thomas Mun, *A Discourse of Trade, from England unto the East- Indies*, London, 1621, rpt. New York, 1971, pp.49-50. 渡辺源次郎訳『イングランドの東インドとの貿易に関する一論』（同訳『外国貿易によるイングランドの財宝』東京大学出版会、1965年、所収）、68頁。
- (42) 鈴木勇「価値および剰余理論の史的序説（3）——17世紀の労働説、W. ペティ——」、『経済学研究』（獨協大学）第52号、1989年3月、141頁。
- (43) William Petty, *Treatise of Taxes*, *op. cit.*, p.34. 邦訳、63頁。
- (44) 経済学に人道主義を含めることに多大の貢献したイングラムは、ペティの思想を、「かれの著作の中の指導的思想」の一つであると断定して（J. K. Ingram, *A History of Political Economy*, London, 1888, rpt. New York, 1967, p.49. 米山勝美訳『経済学史』早稲田大学出版部、1925年、67頁）。ベヴァンもまた、同様の見解に立っている。Cf. W. L. Bevan, “Sir William Petty ; A Study in English Economic Literature”, *Publications of the American Economic Association*, Vol.9, No.4, 1894, p.53.
- (45) William Petty, *Political Arithmetick*, *op. cit.*, p.270. 邦訳、69-70頁。
- (46) コッサは、この点に着目して、ペティは、人民を二分して、生産的な階層と不生産的な階層となし、この区分の規準を有用にして物質的な物を生産するかしないかに置いている、と述べている。Cf. Luigi Cossa, *An Introduction to the Study of Political Economy*, trans. by Louys Dyer, London, 1893, p.141.
- (47) Cf. Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, London, 1776, ed. by Edwin Cannan, Vol. I, London, 1904, 2nd ed., 1920, pp.313-314. 大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』（I）、岩波書店、1965年、522-523頁。
- (48) 井手文雄、前掲書、40-41頁。
- (49) William Petty, *Treatise of Taxes*, *op. cit.*, p.28. 邦訳、53頁。
- (50) 井手文雄、前掲書、58-59頁。
- (51) 渡邊輝雄、前掲書、12-13頁。
- (52) 同上書、13頁。
- (53) 大川政三「ペティ財政論の初期資本主義的性格」、『一橋論叢』（一橋大学）第36巻第6号、1956年、64頁。